

評価方針について（案）

1. 評価対象

- 南極地域観測第Ⅶ期計画に基づき実施された研究観測，定常観測，設営等
- 「総合科学技術会議が実施する国家的に重要な研究開発の評価『南極地域観測事業』について」（平成 15 年 11 月 25 日総合科学技術会議。以下「大規模研究開発評価」という。）及び「大規模新規研究開発の評価のフォローアップ結果」（平成 17 年 8 月 4 日総合科学技術会議評価専門調査会議。以下「フォローアップ」という。）において指摘された事項等

2. 評価の観点

(1) 全体評価

- ・ 学術の水準を高めたか
- ・ 国際貢献を通じて我が国のプレゼンスを高めたか

(2) 観測計画

①重点プロジェクト研究観測，一般プロジェクト研究観測及び萌芽研究観測

- ・ 観測の実績・成果が計画に照らしてどの程度得られたのか
- ・ 観測の目的をどの程度達成したのか
- ・ 国際共同観測計画にどの程度貢献したのか
- ・ 観測の成果が他の研究にどの程度影響を与えているのか等

②モニタリング観測及び定常観測

- ・ 観測の実績・成果が計画に照らしてどの程度得られたのか
- ・ 観測によって得られたデータ等により国際的にどの程度貢献できたのか
- ・ 観測によって得られたデータ等が他の研究にどの程度影響を与えたのか等

(3) 設営計画等

- ・ 設営等の実績が，計画に照らしてどの程度達成できたのか等

(4) 本部業務

- ・ 大規模研究開発評価及びフォローアップの指摘事項に対する具体的な取組状況

- ・ 本部に置かれた各種委員会の活動状況や南極地域輸送業務など研究観測事業のマネジメントの状況等

3. 評価作業の進め方

(1) 重点プロジェクト研究観測，一般プロジェクト研究観測及び萌芽研究観測

【手順1】：実施機関において，評価単位ごとに，3(2)①に記述されている観点から評価を行い，その結果を定性的に記述する。

【手順2】：評価単位ごとに，定性評価を踏まえ，次の評価基準に基づき，SABCで評価を行い，その評価とした理由を附記する。

S：観測計画の達成状況が特に優れている

A：観測計画の達成状況が良好である

B：観測計画の達成状況が概ね良好である

C：観測計画の達成状況が不十分であり，改善を要する

【手順3】：重点プロジェクト観測については，サブテーマ1及び2をあわせて最後に総合評価を行う。【手順2】で示した基準に基づき，SABCで評価を行い，その評価とした理由を附記する。

(2) モニタリング観測及び定常観測

【手順1】：評価単位ごとに，3(2)②に記述されている観点から評価を行い，その結果を定性的に記述する。

【手順2】：評価単位ごとに，定性評価を踏まえ，次の評価基準に基づき，SABCで評価を行い，その評価とした理由を附記する。

S：観測計画の達成状況が特に優れている

A：観測計画の達成状況が良好である

B：観測計画の達成状況が概ね良好である

C：観測計画の達成状況が不十分であり，改善を要する

(3) 研究観測全体

(1)(2)の評価結果を踏まえ，研究観測計画全体について，3(1)に記述されている観点から総合評価を行うこととし，次の評価基準に基づき，SABCで評価を行い，その評価とした理由を附記する。

S：観測計画の達成状況が特に優れている

A：観測計画の達成状況が良好である

B：観測計画の達成状況が概ね良好である

C：観測計画の達成状況が不十分であり，改善を要する

(4) 設営計画等

評価単位ごとに，3(3)に記述されている観点から，それぞれ評価を行いその結果を定性的に記述するとともに，次の評価基準に基づき，SABCで評価を行う。

- S : 観測計画の達成状況が特に優れている
- A : 観測計画の達成状況が良好である
- B : 観測計画の達成状況が概ね良好である
- C : 観測計画の達成状況が不十分であり、改善を要する

(5) 本部業務

大規模研究開発評価及びフォローアップにおける指摘事項について、3(4)に記述されている観点から、それぞれ評価を行いその結果を定性的に記述するとともに、次の評価基準に基づき、S A B Cで評価を行う。

- S : 取組状況が特に優れている
- A : 取組状況が良好である
- B : 取組状況が概ね良好である
- C : 取組状況が不十分であり、改善を要する

評価様式（案）

資料 6 - 2
 南極地域観測統合推進本部総会
 第 14 回外部評価委員会
 H23. 4.15

第Ⅶ期計画 【重点プロジェクト研究観測】 「極域における宙空－大気－海洋の相互作用からとらえる地球環境システムの研究」

サブテーマ(1)：極域の宙空圏－大気圏結合研究

計 画	実 績 ・ 成 果	実 施 機 関 評 価	評 価 意 見
<p>極域は、地球磁気圏に流入した太陽風エネルギーが蓄積・消費される様相が地球上最も顕著に起こり、それはオーロラ現象として視覚的に捉えられることから、宇宙の窓と例えられる。極域電離圏・熱圏には、太陽からのエネルギーばかりでなく、下層の対流圏・成層圏・中間圏からのエネルギーや運動量が流入し、極域超高層大気のエネルギーバランスや運動、全地球規模の大気大循環に大きな影響を及ぼしていると考えられている。実際、地球温暖化に伴う中層・超高層大気の寒冷化が進行していることを示唆する極域夏季中間圏エコー（PMSE）現象の増加、などの報告がある。本サブテーマでは、超高層大気の寒冷化現象やオーロラ活動エネルギーの下層大気への影響などを宙空圏－大気圏上下間結合や地球規模の大循環の視点で明らかにする。そのためには両極での同時観測が特に重要であり、IPY2007-2008期間の国際プロジェクトInterhemispheric Conjugacy in Geospace Phenomena and their Heliospheric Driver (ICESTAR/IHY) 計画を推進することとなる。この計画は、南北両極域における超高層現象や電磁環境の類似性や違いを定量的に観測することにより、地理的・地磁気的な南北対称性・非対称性に起因するエネルギーや物質の流入・輸送・消費・変質過程やその機構を明らかにすることを目的としている。この計画に呼応し、オーロラ帯に位置する昭和基地－アイスランド地磁気共役点、さらに高緯度側に位置する両極のカस्प域や極冠域において光学装置やレーザー・磁力計などによるネットワーク観測を行う。また、MF・流星レーダーやライダー観測により、成層圏から中間圏にかけての温度および大気微量成分の観測も同時に実施することにより、極域電磁気圏と中層・超高層大気の結合と変動を包括的に理解する。この領域での研究は太陽地球系物理学・科学委員会（SCOSTEP）が主催する国際共同研究計画「太陽地球系の宇宙気候と宇宙天気研究（CAWSES：2004～2008年）」にも貢献するものである。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>※観 点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 観測の実績・成果が計画に照らしてどの程度得られたのか ・ 観測の目的をどの程度達成したのか ・ 国際共同観測計画にどの程度貢献したのか ・ 観測の成果が他の研究にどの程度影響を与えているのか <p>等</p> </div>	<p>【達成度】</p>	<p>【達成度】</p>

評価スケジュール（案）

